元気な職場づくり運動から組合員とのつながり強化へ

ＪＡ山口県
組合員組織課　**安岡博文**　課長

やすおか・ひろふみ／平成5年ＪＡ阿北に入組し、購買、金融窓口、総務（広報・電算）の業務にあたる。8年合併後のＪＡ山口阿武では、金融窓口、販売の業務を経験。18年合併後のＪＡあぶらんど萩で、企画情報課（企画管理・広報・電算）課長に。以後、企画経理（企画管理・広報・電算・経理）、販売、企画情報（企画管理・広報・電算・女性部・くらし・家の光・日本農業新聞）の管理業務にあたる。31年4月にＪＡ山口県合併後は、広報課長（広報・ウェブサイト・テレビ・ラジオ・ＣＭ・ＳＮＳ・マスコミ対応・農業新聞）を経て、令和2年から現職。

信頼される職員の育成に向けて「元気な職場づくり運動」を展開しているＪＡ山口県。部署ごとに『家の光』などを活用して記事の情報共有をはかり、組合員との対話力強化をはかっています。この運動を先導する組合員組織課の安岡課長に、組合員とのつながりをつくる教育文化活動の重要性について聞きました。

組合員との強い関係性を体感

――安岡課長は30年ほど前に故郷へのＵターンを機に入組されました。ＪＡ職員となって組合員と接するなかで気づいたこと、業務で印象に残っていることはありますか。

入組当時は、購買担当として日々、肥料や飼料の配達で組合員宅を訪問していましたが、入組したての私でも「農協です」と

女性部リーダー研修会で楽しい学びと仲間づくりの場を提供

言えば、気軽に話しかけてくれる。生まれ育った地元であったこともあるとは思いますが、農業や農協に関しても、雑談しながらさまざまなことを教えてもらいました。配達を間違えて怒られた苦い経験もありましたが、アドバイスやフォローをしてくれました。今思えば、当時は組合員も集落全体でもＪＡに対する愛着があって、つながりが強かったのでしょう。関係性の強い組織基盤こそがＪＡの強みであると感じています。

――平成25年から、教育文化・家の光事業に携わるようになりました。教育文化活動について、その必要性をどのように捉えていますか。

組合員の高齢化や農業生産の縮小、職員の人員減など、ＪＡには厳しい現実が立ちはだかっています。しかしそれでも、ＪＡが目指すべき「生活者（組合員）の幸せづくり、願いの実現」という原点を見失わないようにしたい。「教育文化活動は、いわば土づくりである」と言われます。「ＪＡの組織や事業も農産物と同じように、教育文化活動という堆肥を施せば、きれいな花が咲き立派な実がなる」という言葉を大切に、地道な活動を展開していきたいと思います。

家の光料理教室では地元農産物の魅力を発見

私は、入組当時から『家の光』を愛読しています。『家の光』には、料理や手芸、読み物などの記事のほか、ＪＡの事業・活動や特性を解説する記事もあって、職員の教育資材といえます。協同組合運動と教育文化活動を展開するために、つねに学び続けることが重要だと感じています。

教育文化活動の展開は職員教育がカギ

――ＪＡ山口県に合併後、経営改革を進めるなかで、令和元年８月に「教育文化活動基本方針」を策定されました。その経緯と中身を教えてください。

組合員や地域住民とのつながりを強化し、新たなファンづくりを行うことが目的です。ＪＡ山口県の各統括本部の家の光プランナー11名をメンバーとし、本所組合員組織課を事務局とした「組織広報プロジェクト」を立ち上げて検討を開始しました。

合併後に実施した総代アンケートでは「ＪＡが遠くなった」「合併メリットがみえない」など、組合員離れを感じる回答も多く寄せられ、ＪＡと組合員や利用者をつなぐ支所や直売所の役割はますます大きくなっていくことは明らかでした。

「ＪＡは地域になくてはならない」と思ってもらえる関係づくりを行うにはど

うするべきか。メンバーで協議を重ね、統括本部巡回による聞き取りや支所へのアンケートなども行いました。

プロジェクトを進め、ＪＡの強みは「食と農」と、「人と人のつながり」であることを共有し、「つなぐ」をキーワードとした、教育文化活動基本方針を作成。令和３年３月に組織合意を得て、全体で取り組むことになりました。

この基本方針では、「教育文化活動」と「くらしの活動」の目的を整理し、定義を「地域とＪＡを「つなぐ」活動で、ＪＡファンを拡大し、農業振興、地域の活性化を目指す。」としました。また、支所や直売所を拠点として、組合員や地域住民と職員が「ともに」農業や地域の事を考え「地域を元気にする」ことを目的にしていることから愛称を「元気な地域づくり活動」としました。

毎年、家の光大会を開催。ロビーでは、記事を活用した手芸作品を展示している

――元気な地域づくり活動を具体化するために、職員育成の必要性を挙げています。

各支所で「支所行動計画」を策定するだけではなく、役職員が一体となって活動を実践していくために３つの柱を定めています。

その一つが「信頼される職員の育成」であり、取り組みとして「元気な職場づくり運動」を実施しています。教育資材である『家の光』『地上』「日本農業新聞」を職員が購入しても読まないという現実もありました。そこで、役職員がこれらの教育資材を活用し、ＪＡや農業への理解を日常から深め共有することで、「読み解く力」や「考えをまとめる力」「自分の言葉で伝える力」を養い、組合員と対話のできる職員を育成することを目指します。

組合員から信頼できる職員の育成

――「元気な職場づくり運動」の現在の取り組み状況や重視している活動を教えてください。

全部署で毎月最低１回は、朝礼や会議のなかで３誌・紙から「気になる記事」を発表し合い、情報共有を行っています。所属長は年間計画を作成し、実施内容

を本所に報告します。本所は全体の取り組み状況を各種会議体で共有しています。

部署ごとに『家の光』などを使って意見交換を行っている

実践初年度の３年度は、各部署の取り組みをイントラネット上で共有し、活動の定着化をはかり、181部署からの報告がありました。なかには「それぞれに視点が違い、新たな気づきがあった」「協同組合について話すきっかけになった」といった、うれしい報告もありました。

４年度は160部署からの報告がありました。５年度も実施していますが、輪番制で担当者を決定し、記事の概要、担当者自身の感想を発表し、発表後に部署内で意見交換をするようにしています。

また、所属長は、本運動の趣旨に沿い、「元気な職場づくり運動年間計画・実施報告書」にて運動の目的及び活用計画、担当者を記入し、配下職員に目的、運動実施による期待、活用内容などを部署内に周知しています。

毎月の運動実施後、担当者は様式に実施日及び活用誌・紙名、活用記事、発表内容・感想を記入し、所属長に提出しています。

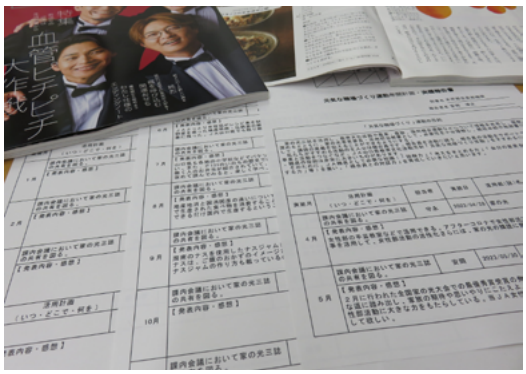
――「元気な職場づくり運動」による成果や、新たな発見、気づきはありましたか。

半期ごとの報告には次のような内容がありました。

- 『家の光』記事から、組合員や顧客に話題として提供できる記事を選んで、支所内で発表、意見交換を行った。 月一回ではあるが、記事を活用した発表により、組合員や顧客と話すきっかけづくりや、職員の話す力の向上にもつながったと思う。来期は、活用する資料を増やし、実施回数も増やしたい。
- 担当を持ち回りにすることで、一人一人が「元気な職場づくり」運動の目的を考えてくれた。
- 『家の光』の気になる記事を発表してもらっていたが、だいぶ慣れてきて女性職員も発表してくれるようになった。引き続き継続したい。
- 自分の考えや思いを伝えることができたと思う。事前に予習等を行う職員もおり、元気な職場づくり運動が定着してきたと思う。

今後は、職員が地域での活動にかかわり、ＪＡ事業へつながっていると実感できるような仕掛けも必要と感じています。

組織は人です。まずはＪＡ職員の人づくりが教育文化活動を進めるうえで要になると考えています。


元気な職場づくり運動の実績報告書には、発表内容や感想を記録。組合員との対話力向上をはかる

組合員とのつながりを積極的につくる

――教育文化・家の光プランナー専修講座の動画を、ＪＡの各統括本部のプランナーの方々の集合研修時に活用されました。どのようなねらいがありましたか。

ＷＥＢを使って個々で視聴する場合、費用面で節約ができて参加しやすいという利点はあります。しかし、言葉の抑揚や感情を感じとりにくく、聞くだけになってしまうという欠点もあります。

そのため、教育文化活動をすすめる必要性を一番感じているプランナーが一堂に会し情報共有するために、集合型としました。一部の講義は家の光協会の職員から直接話を聞く形にしています。

まだまだＪＡ全体でこの教育文化活動をすすめるという意識が低く、通常の業務が優先され、組織活動などに十分にかかわれないのが現状です。しかし、なぜ教育文化活動が根付かないのかを、今一度考えを巡らせるきっかけになっていると思います。

――これからのＪＡづくりに必要だと感じていることは、どんなことですか。

ＪＡの事業と組織活動は車の両輪です。組合員がいて、さまざまな組合員組織活動があって初めて事業が成り立ちます。組合員とのつながりを積極的につくっていくことは、ＪＡ本来の仕事であり、そうしなければ、ＪＡの持続性・成長はないと思います。

プランナーだけでなく、全職員がもっと積極的にかかわって横軸の役目を果たし、地道に行動し活動を続けることで「つながり」をつくることができればと感じています。

令和５年に職員の階層別による教育文化セミナーを開催

組合員、地域としっかり向き合って、その地域の良さを見つけ、組合員と共に行動し、共感し、感動し合える、そんなＪＡを目指していきたいと考えています。